# 国策紙芝居―川越市立博物館調査

原田　広
（非文字資料研究センター　研究協力者）

2020 年度非文字資料研究センターの各地紙芝居調査の一環として、前掲「小山市立博物館」調査（大串潤児・新垣夢乃研究員）と同日、埼玉県川越市立博物館が所蔵する紙芝居の調査を行った。川越は、江戸時代に川越城を中心に「小江戸」と称される城下町が形成され、武蔵国の商工農物資の集散地として栄えた地である。同館は、その歴史ある川越城の二の丸跡に 1990 年 3 月 1 日に開館した地下 1 階地上 3 階建の施設であり、その隣接地には 2002 年 12 月 1 日に川越市立美術館が開館している。当日は、副館長・岡田賢治氏を訪ね、本センターとして、未見紙芝居の発掘と紹介（作品解題、目録補訂）を目的としていることをお話しし、『川越市立博物館だより』第 47 号（2006 年 3 月 17 日）の特集記事「戦時中の紙芝居と国民」で紹介された下記資料の接写についてご了解をいただいた。

## (1)『モモタロウ：決戦体制版』、『浄峠』

本資料は、『モモタロウ：決戦体制版』の台紙として紙芝居『浄峠』の脚本面を貼り合わせたものである。『モモタロウ：決戦体制版』は、川越市立博物館の記録簿に拠れば、「1996 年ルンビニー幼稚園からの寄贈」資料であり（ルンビニー［現ネパール］は釈迦の生誕地にちなむ）、一方、『浄峠』の奥付面には「真行寺北部保育所備品」の縦墨書が残る。これらの記録は同園の次のような歴史を留めるものである。―すなわち 1930 年浄土真宗真行寺日曜学校設立に併せて「川越市北部託児所」を開設、やがて「川越北部農繁保育所」と名づけられ、先駆的な子どもの教育施設として認められる。終戦後の一時期中断をはさみ、1955 年「学校法人ルンビニー幼稚園」となり現在に至っている（同園公式サイトから）。

『モモタロウ：決戦体制版』は、私どもの既往調査（全国書誌暫定版）によって、子どもの文化研究所（1944 年 6 月刊）と柳城短期大学（刊年不明）における所蔵が確認されているが、絵画面のみを残す川越資料の刊年特定は不能である。こうした作品の当時における上演は、別途保管した脚本か、あるいは演者の創意によ

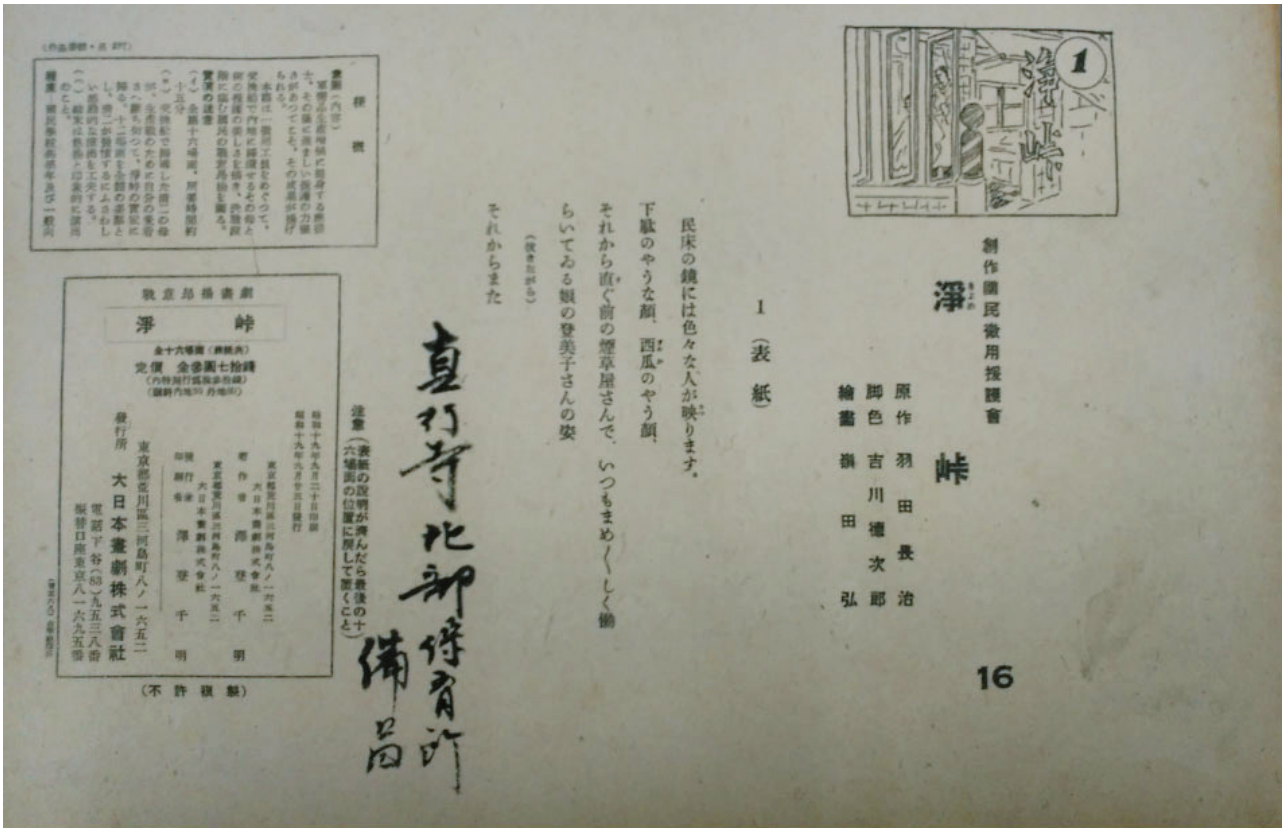


写真3　『浄峠』

って行われたものであろう。「決戦体制版」とは、戦時下の給紙制限を受けて高橋五山・全甲社紙芝居協会の工夫で部厚な台紙に代わって製作された一連の作品である（森山優研究員の提供情報による）。

『浄峠』は、『雑誌紙芝居』7巻10号（1944年10月10日）の新作月評から、「徴用援護会創作；羽田長治作；峯田弘画、大日本画劇」の刊行記録が認められていたもので、所蔵機関の判明は川越市立博物館が初となる。今回調査により、「出版年月日：1944年9月25日、全場面：16枚」の事項が判明した。脚本のみではあるがコマ絵と併せて作品の全容判読は可能である。―主人公の清二は床屋を営む伯父に育てられていた。両親は借金返済のためアメリカに渡っていたが、開戦にともない抑留され、父は他界した。戦局が進み清二にも徴用令が届くなか、母親が日米交換船で帰国。しかし母子の交情を交わす間もなく、母は故郷の浄峠に戻ってお国（食糧増産）のために働き、清二もまた出立の決意を新たにするというものである。開戦にともない交戦国や断交国に取り残された外交官や駐在員、留学生などを帰国させるために1941年と1942年に運航された「日米交換船」の登場は、戦時下紙芝居史上おそらく本作品が唯一と考えられるが、脚本中に特別の説明はなく、いささか唐突の感は否めない。本作品の「創作」に関与したとされる国民徴用援護会が、国民徴用扶助規則（昭和16年12月22日厚生省令第68号）の制定にともなう援護団体（財団法人）であるところから、総国民徴用のプロパガンダに創作の比重を置いたものであったのであろう。

### (2)『防空必携：我等の防空』第一部．基本訓練篇（防空指導画劇その4）、第二部．警戒・対策篇（防空指導画劇その5）、第三部．空襲篇（防空指導画劇その6）

本作品は、私どもの調査（全国書誌暫定版）において国会図書館（第一部のみ）、大阪府立図書館（全三部）の所蔵が確認されていたが、川越市立博物館資料は、市内旧家の蔵から救出・同館に収蔵されたものとのことであり、全三部揃い、保存状態も約80年を経過したとは見えないほど極めて良好であった。同資料に拠り書誌事

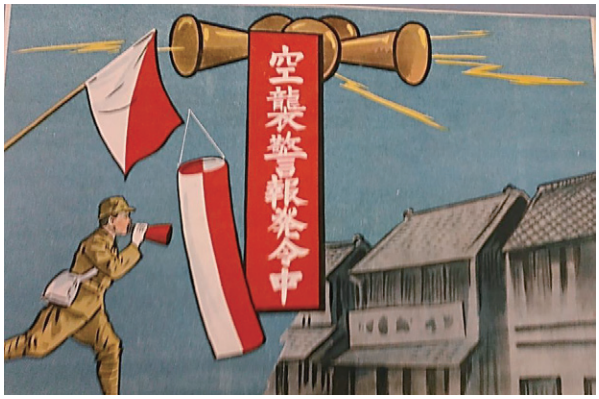


写真4　『我等の防空』第二部警戒・対策篇（部分）

写真5　『我等の防空』第三部空襲篇

項を補記すると、「編者：大日本防空協会、出版者：大日本画劇、出版年：1943年3月」である。

編者の大日本防空協会は、内務省が主導する“国民防空”政策の一環として1939年に設立された防空思想の普及宣伝を業務とする組織であり、『国民防空の要領』1939、『国民防空読本』1939、『家庭防空消防指導要領』1940、『時局防空必携』1941、『少年防空読本』1941といった啓蒙・手引き書を相次いで出版していた。紙芝居としても、シリーズ「防空指導画劇その1～その3」として『焼夷弾』、『防空壕』、『防空監視哨』を1941年に創作している。

1943年3月刊の本シリーズ続編は前者の改訂であるに留まらず、より一層の実践的なマニュアル化が図られている。その背景には、1942年6月ミッドウェー海戦、1942年8月西太平洋のガダルカナル島・ソロモン諸島海戦で勝利を収めたアメリカ海軍に対して、日本軍が、1943年9月30日の御前会議で、マリアナ諸島・パラオ諸島を要衝とする「絶対国防圏」構想を策定したことが挙げられる。本土空襲が現実性を以って迫っていたのである。しかし、内容的には、“空襲恐るるに足らず”の精神で防空・防火活動に対処すべきことを隣組を単位とする国民に求めるものであった。「敵前逃亡」を許さない隣組体制と「空襲を恐れない国民像」形成への協力を基本軸とした“国民防空”政策は、太平洋戦争末期の全国規模空襲において甚大な被害を招く背景となった。

川越市立博物館での紙芝居調査は、当初から目的とした上記の2点であったが、いずれも稀少な作品であり、有意義な結果が得ることができた。『浄峠』は初めて所蔵館が判明したものであり、全甲社「決戦体制版」創作の具体的裏付けを得ることができた。また『防空必携：我等の防空』三部作の全容を把握することができたことは、「防空もの紙芝居」の比較研究を進展させるうえでたいへん意義深いところである。2020年コロナ禍の厳しい運営が続くなか、快く調査依頼を受け入れていただいた同博物館に感謝を申し上げたい。

以　上